

特設分科会 分散会 A「東日本大震災と学童保育」の報告

# 学童保育の役割が果たせる 「日常生活」の大切さを自覚して

真田 祐

全国学童保育連絡協議会 事務局次長

二〇一四年一〇月二二日・二三日、岩手県で、第四九回全国学童保育研究集会（以下、全国研）を開催しました。

全国研では、二〇一一年一〇月に開催した第四六回全国研から、毎年、特設分科会「東日本大震災と学童保育」が設けられ、被災した地域の保護者や指導員の方々などにも参加していただき、学童保育や学童保育関係者の被害の状況を共有し、復旧・復興のための課題などについて考えあい、学びあっています。

今回、特設分科会の分散会 Aには、二五都道府県から八十数名の方が参加しました（また、被災した地域を訪問する分散会 Bも設けられ、約四〇名が参加しました）。

この分散会では、はじめに、全国学童保育連絡協議会のこれまでの取り組みのふり返りと、今後の課題が会では、学童保育の目的・役割や、その意味をあらためて確かめあい、防災や安全対策も含め、基本的な学童保育のあり方についても共に考えあいました。

分散会の世話人で、福島県学童クラブ連絡協議会会長の山田和江さん（福島市・指導員）の、「震災は津波だけでない。福島では目に見えない放射線の被害がまだ続いている」という発言に、多くの参加者が、震災の厳しさが依然として続いていることを学びました。

岩手県気仙地区学童保育連絡協議会会長の阿部勝さん（陸前高田市・保護者）の、「震災後、保護者は指導員を支えてきた。学童保育の子どもを守るためには指導員を支えることが必要だった。学童保育の根幹に、これまでの日常で築きあげてきた親と指導員の信頼関係があった。学童

報告されました。

被災した地域の多くでは、震災後、「子どもたちが安全に安心して過ごせる放課後等の毎日の生活を保障し、働きながら子育てする保護者を支える」という役割を持つ学童保育の必要性が高まり、入所児童数が増えています。災害時、学童保育に通う子どもたちの安全をどのように守るかは、子どもの命を預かる私たちにとってたいへん重要な課題です。そして、学童保育に通う子どもとその家庭を守り、支えるために、日々、懸命に働いている指導員を支えていくことも大きな課題のひとつです。

また、「学童保育が本来の役割を果たせるように条件整備を図る」という課題も明らかになっています。学童保育の運営方法、実施方法、実施条件、保育内容などは、市町村の学童保育施策に大きく左右されています。

保育と学校、行政との関係も大事だった。こうした『日常』をどのようにつくっていくのかが問われる」という発言からは、防災・安全対策を考えるうえで、学童保育の役割が果たせる『日常』をつくっていくことが土台となることの大切さを学びました。

参加者からは、つぎのような感想が寄せられています。「やるべきことをやったうえで『日常』はとても大切であると思った」「『日常』の生活の大切さ、保護者とのコミュニケーション、学校、行政との連携等、大切なことをたくさん教えてもらいました」。

これからも息の長い取り組みが必要であること、それぞれの学童保育、地域で「子どもたちの命を守る学童保育」を追求していくことの必要性を学んだ分散会でした。

す。そのため、市町村や各施設によっても、条件や環境、運営のあり方などに、大きな違いがあるのが現状です。多くの地域の学童保育が、たいへん厳しい条件のなかで運営されています。公的な責任があいまいなため、学童保育の役割について行政や運営者の理解が不十分な地域もあります。東日本大震災後の復旧・復興に際しても、十分な方策がとられないところがあるなか、これまで抱えていた問題が浮き彫りになりました。

国は現在、子ども・子育て支援新制度において市町村を実施主体とし、学童保育の基準を法的に定めるなど条件整備を図ること、指導員の処遇の改善を図ることなどに取り組んでいます。このことは今後、災害時の復旧・復興に大きく影響を与えると考えられます。

このような背景をふまえて、分散